

説教 『影ではなく実体を』 山本 護牧師  
聖書 列王記上 19:11~12 / コロサイの信徒への手紙 2:16~19

「偽りの謙遜と天使礼拝にふける者から、不利な判断を下されてはならない。こういう人々は、幻で見たことを頼りとし、肉の思いによって根拠なく思い上がっている(コサイ2:18)」。コロサイの町は、地中海通商に伴って東西南北の文化や宗教が混生していた興味深い地域。教会の中にも幻視や神秘体験を誇る者が少なからずいたらしい。自慢できるほどでもないプチ神秘になら、私も遭遇する。

夜明け近く、半覚醒の意識に御言葉が浮かんだ。「風の中に主はいない、地震の中にもいない、火の中にもいない」。朝の祈禱時、日々の御言葉を開くと、はたしてこの聖書箇所であった(列王上 19:11~12)。こんなことは時折あるから偶然でもないだろうが、このプチ神秘が意味するところは分からない。

「風、地震、火」。御言葉直接の意味よりも「四大元素のことか」と直感した。彼の地や西欧では伝統的に、「地・水・火・風」は宇宙を構成する元素だと考えられていた。ちなみに東アジアでは「地・空・水・火・風」の五大元素で、空海は「五大皆有響(声字実相義)」と書いている。読み解けば「森羅万象のすべてが真理を響かせている」の謂だろう。列王記の記述は、これとは少しばかり違う。

「風～地震～火の中にも主はおられなかった。火の後、静かにささやく声が聞こえた(19:11~12)」。実に微妙で興味深い。風・地震・火は、主なる神の手がかりと結びついてはいても(19:11)、「主はおられなかった(19:11~12)」と三度くり返して念を押す。人は神を、自然をも支配される方として大仰に見がちだが、神はそんな劇的な現れ方をなさらず、さりげなく静かな声でささやかれる(19:12)。

ひどい苦しみを被ると、人は「なぜこんな仕打ちをするのか、私がどんな悪い事をしたのか」と神に詰問する。憤っても答えは掴めない。叫び声が尽き、泣き声が枯れ、打ちひしがれて沈黙する時、人は神の「静かにささやく声を聞く」。声高な救いの喧伝がやみ、かまびすしい独白に疲れる時、ふいにすつと「静かにささやく声を聞く」。その声は、具体的に、私たちの現実在即した示唆を与える。

風と共に、地震や火と共に、神はおられる(19:11)。しかしそれは「五大皆有響」と同じで、神がおられる「影」に過ぎない。自然の内に神の「響き」を感じ取る柔らかいセンスは尊い。しかしそれは「神の言葉」ではない。響きだけで御心を判断する時、そこに人間の意図や願望が入り込む。

「あなたがたは食べ物や飲み物のこと、また、祭りや新月や安息日のことで誰にも批評されてはならない(コサイ2:16)」。食物規定や暦の禁忌はヘブライの律法だが「これらは、やがて来るものの影にすぎない(2:17)」。偽りの謙遜と天使礼拝(2:18)は地中海宗教の神秘体験で、「幻で見たこと頼りとする(2:18)」人間の傲慢だ、とコロサイ書は批判する。影が広がると人は傲慢になり「偶像」を刻む。

森羅万象に響く神の気配は「やがて来るものの影にすぎず、実体はキリストにある(2:17)」。実体なるキリストこそ「静かにささやく声(神の)」なのだ。私たちは「キリストと共に葬られ～キリストと共に復活させられた(2:12)」者。これこそが私たちの身に帯びている実体。私たちは不十分な影ではなく、「静かにささやく声」を頭として相互に「結び合わされ、神に育てられて成長してゆく(2:19)」。



#### 【おまけのひとこと】

光がある所 影はどこにでも映し出される だが実体ではない 実体の質量を抱えられない時  
影絵物語が安らぎとなる 焦ることはない 気力を取り戻してから おずおずと実体に触れればよい